書籍「葬式は要らない」を読んで

誰にも看取られず誰にも遺体を引き取られない無縁死は年間３万２千人、高齢者の孤独死はここ１０年で５倍、消えた高齢者の所在不明問題や高齢者の死を届けず遺体を家に置いたままの事件、これからは単身世帯数が夫婦と子ども世帯数数が逆転、等々、今後益々血縁、地縁、社縁が薄れる「無縁社会」の要因に関する報道や情報を見聞する昨今。

こうした「無縁社会」の現実を知ると、人にとっての葬儀とは何なのかとふと疑問に感じたり…。そうした折、書店の店頭でそのものずばりの「葬式は要らない」のタイトルが目に入り、疑問解消の参考になればと購読した。

著者は、現在は東京大学先端科学技術研究センター客員研究員の宗教学者である。
葬式のやり方や作法の本は数多く出版されているが、執筆の趣旨を、葬式は予定なくやってくるものなだけに短時間で読める新書版し、「葬式に臨むにあたっての基本的な考え方や態度で、方針である」と語るだけに、「人の死を葬う」という葬式に纏わる歴史的背景を紹介しながら、平易な文章で事例を含めて解説しているので、実に読み易く解り易かった。

奈良時代は天皇が国の統治と安泰を願って壮大な寺を建立、平安時代は浄土を望んで貴族たちが競って華美な寺を競って建立、戦国時代以降の武将は村人を各寺の檀家になることを武将にとっての邪教の信者でない証としたこと、明治新政府以降は寺の経済的基盤の寺領なくなり、経済的により葬式仏教に成らざるを得ず、今の現状に至ってる等々は、興味深く読んだ。
日本では圧倒的に仏教による葬式が多い理由も解った。
また、庶民が死後戒名をつける風習は仏教徒の多い国の中でも日本だけとかを初めて知った。

釈迦の修行の主眼と悟りは「あらゆるものに対する執着を捨てる」ことであり、「死後のことは、死んでみなければ知ることができないとし、生前に死後について考え語ることはできないし無駄だ」と説いていることも紹介している。
思い起こせば、若い時に訪ねた薬師寺で「奈良時代の寺は仏教の教えを学ぶための場であったので、奈良にある寺には墓がない」との僧侶の説話を思い出した。

これから恐らく益々、血縁、地縁、社縁の薄れて行く社会だけに、直葬か仏式葬儀か、戒名か俗名か、墓への納骨か散骨か、等々、自らはどう選択するかの参考までに、本書を読まれてはいかがですか。

阿部幸泰　　（2010 年 11 月 6 日　記）